松江市文化財調査報告書　第68集

文化財愛護
シンボルマーク

川原後谷横穴群発掘調査報告書

1996年3月

松　江　市　教　育　委　員　会

財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書　第68集

文化財愛護
シンボルマーク

川原後谷横穴群発掘調査報告書

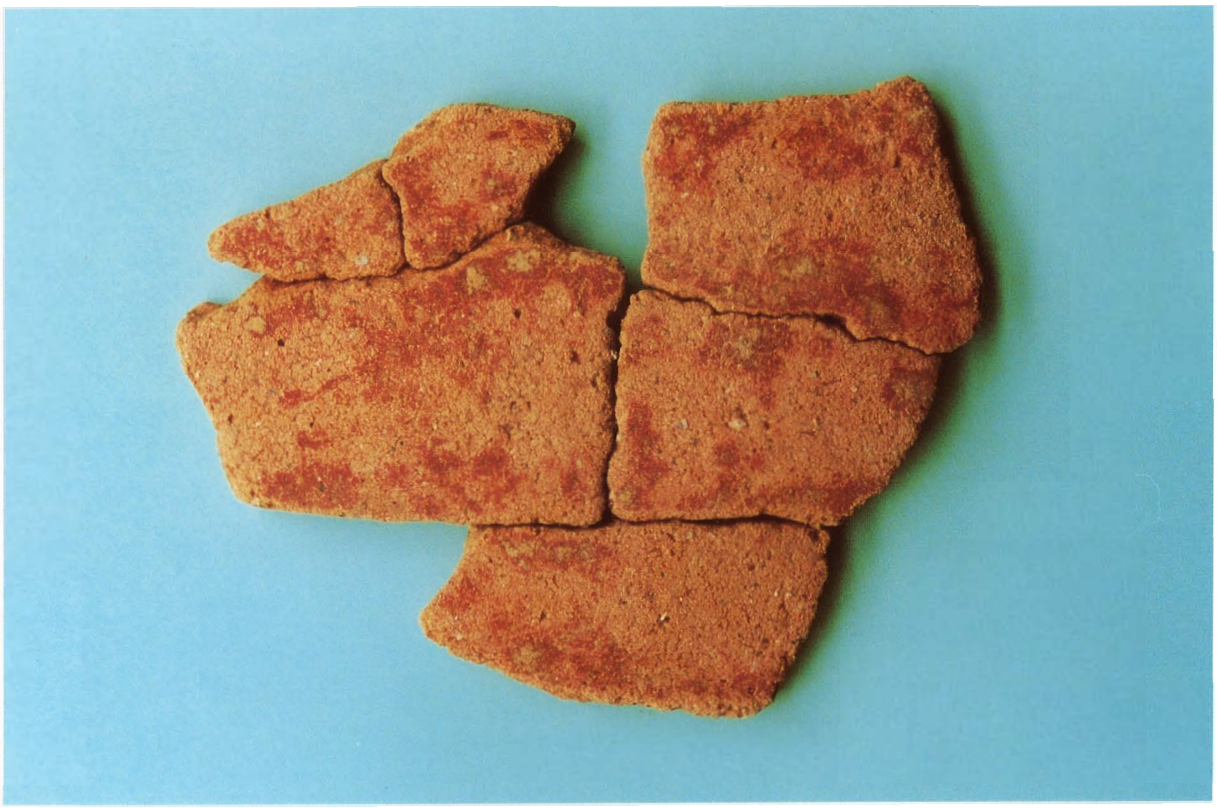
1996年3月

松　江　市　教　育　委　員　会

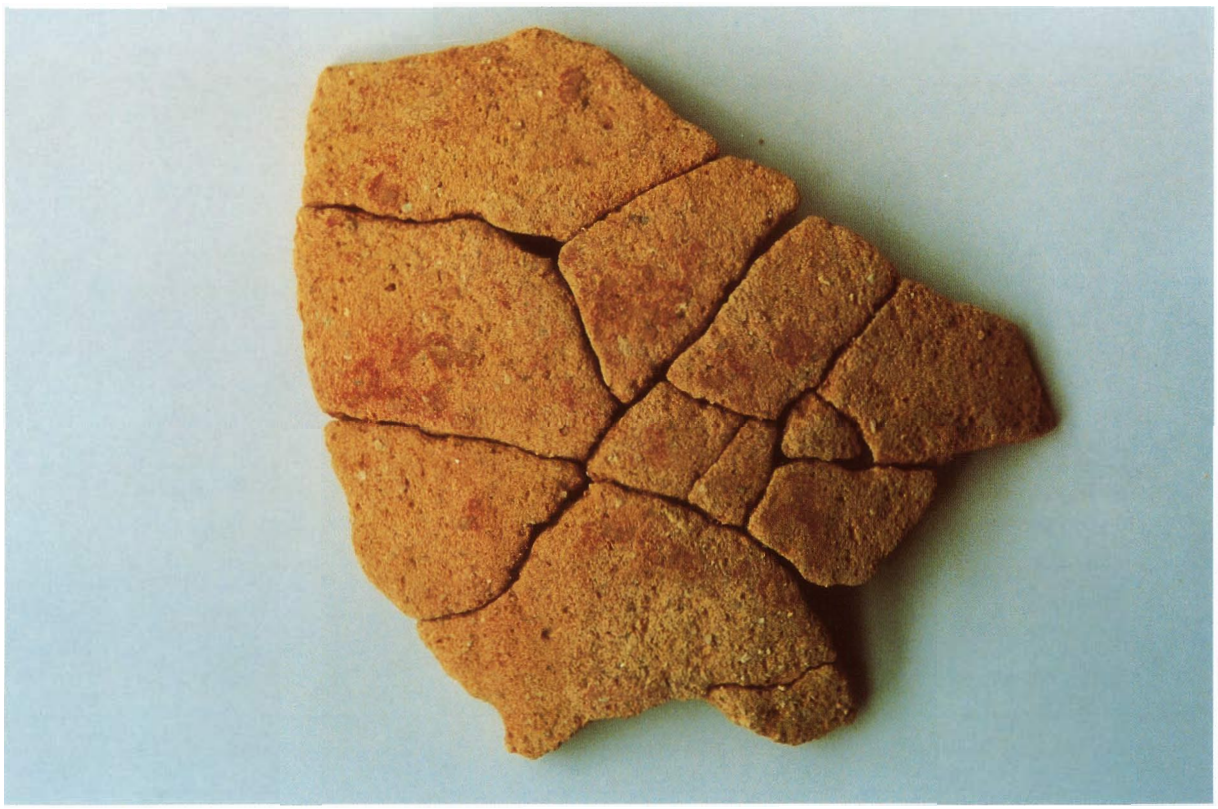
財団法人松江市教育文化振興事業団

１号穴遺物検出状況

ＳＸ－０１完掘状況



１号穴出土赤彩土器（第14図11）



１号穴出土赤彩土器（第14図１２）

例　　言

1．本書は、平成7年度において財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した産業廃棄物処分場建設に伴う農道整備事業にかかる川原 後 谷横穴群（かわはらうしろだにおうけつぐん）の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、出雲環境株式会社から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人　松江市教育文化振興事業団が委託を受けて実施したものである。

3．調査の組織は下記の通りである。

依頼者　出雲環境株式会社
　　所長　幸前　徹
主体者　松江市教育委員会
事務局　教　育　長　諏訪　秀富
　　生涯学習部長　伊藤　博之
　　文 化 課 長　柳原　知朗
　　文化財係長　岡崎雄二郎
実施者　財団法人　松江市教育文化振興事業団
　　理　事　長　大塚　雄史
　　事 務 局 長　佐藤千代光
埋蔵文化財課調査係長　中尾　秀信
調査者　調 査 係 長　中尾　秀信
　　調　査　員　遠藤　正樹
　　調査補助員　稲田　　奨
　　作　業　員　福田　正秋　米田喜代利　米田喜美恵　福田スミエ
　　福田　英子　福田千恵子　藤井トシ子　松田　富江

（敬称略）

4．調査の実施にあたっては、次の方の協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

調査協力　　幸前　徹　（出雲環境株式会社所長）

5．出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。

6．実測、写真撮影及び執筆・編集は遠藤が行い、浄書は遠藤と稲田が行った。

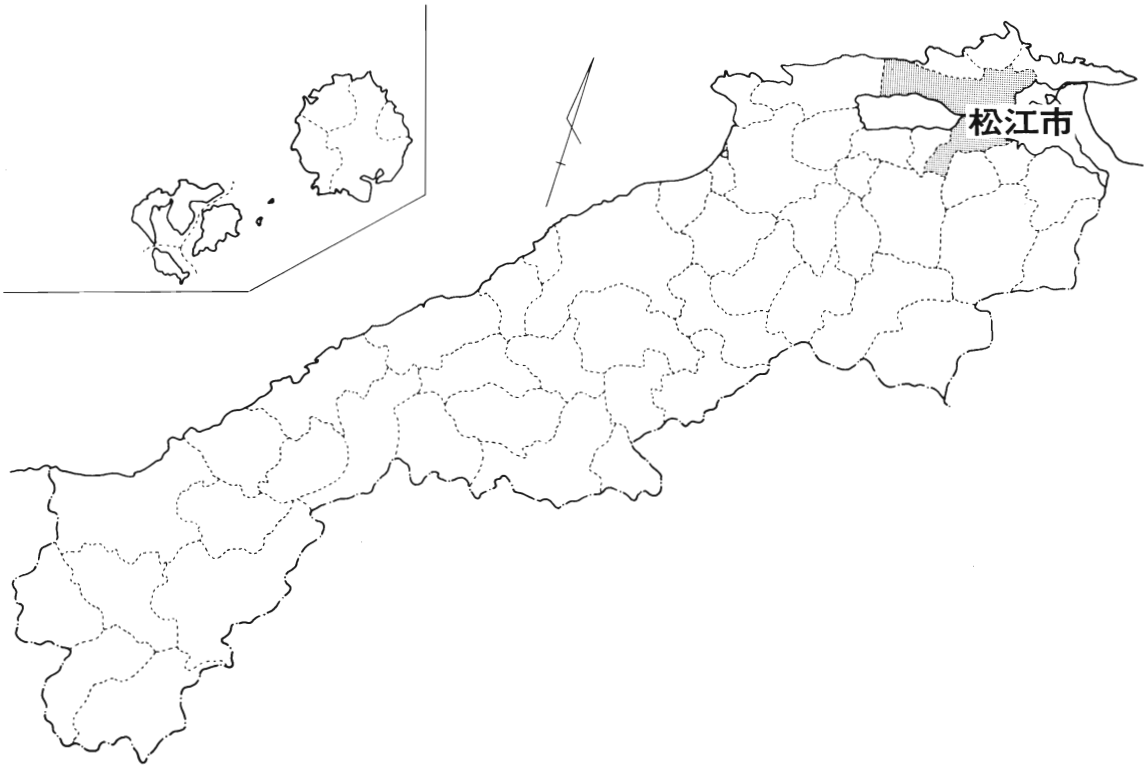
7．拓本は、荻野　哲二　氏（松江市教育委員会嘱託員）の協力を得た。

文化財愛護シンボルマークとは……

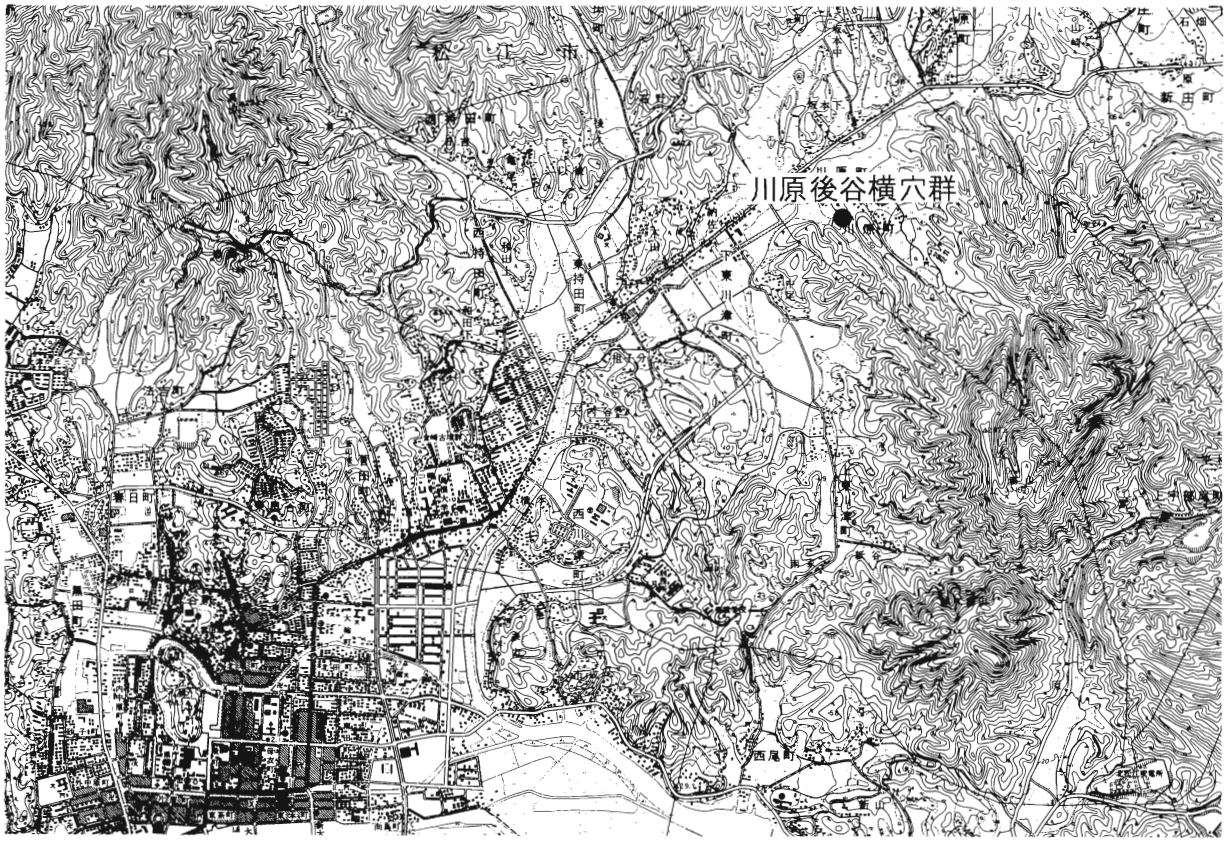
このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗供、すなわち斗と供の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。

文化財愛護
シンボルマーク



第１図　島根県地図



第２図　松江市地図

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯……4
第２章　周辺の遺跡と環境……4
第３章　調査の概要……7
⑴調査概要……7
⑵出土遺物について……12
第４章　小結……15

挿　図　目　次

第１図　島根県地図……2
第２図　松江市地図……2
第３図　周辺の遺跡……5
第４図　川原後谷古墳群詳細図……6
第５図　発掘調査区……8
第６図　１号穴前庭部……8
第７図　SX–01平面図……9
第８図　SX–01セクション……9
第９図　Ⅱ区中央セクション……10
第10図　Ⅲ区中央セクション……11
第11図　Ⅲ区南壁セクション……11
第12図　SX–02……12
第13図　Ⅳ区南壁セクション……12
第14図　1号穴出土遺物……13
第15図　SX–01出土遺物……14

図　版　目　次

図版１　１号穴セクション（南方から）、1号穴セクション（西方から）、1号穴遺物検出状況、１号穴赤彩土器検出状況、１号穴完掘状況、SX–01セクション、SX–01（北方から）、SX–01（西方から）……16
図版２　SX–01遺物検出状況，SX–01完掘状況，Ⅱ区中央セクション，SX–03完掘状況，Ⅲ区中央セクション，Ⅲ区南壁セクション，Ⅳ区南壁セクション，調査後全景……17
図版３　１号穴（第14図）・SX–01（第15図）出土遺物……18

第1章　調査に至る経緯

本遺跡は松江市街地北東の川原町地内の丘陵裾部に存在する。

この地において出雲環境株式会社が産業廃棄物処分場建設に伴う農道整備工事を計画した際、平成5年度において分布調査、及びトレンチ2本による試掘調査を実施した。その結果、西向き丘陵斜面裾部に設定したT–2から、古墳時代後期の須恵器片多数と、横穴墓の前庭部と玄室と思われる地山の加工痕が検出された。また、付近には横穴墓に特有の凹状の地形が4～5箇所認められたことから横穴墓群の存在が確認され、「川原後谷横穴群」と命名された。

この遺跡の取扱いについては、市教委と開発事業者とで協議した結果、路線変更は困難であることから平成7年度において発掘調査を実施することとなった。現地調査は平成7年9月21日から同年12月21日までの合計45日を要して実施した。

第2章　周辺の遺跡と環境

現地は北西方向に舌状に突き出た丘陵の西側斜面に位置する山林で、所在地は松江市川原町330番地外である。

本遺跡の周辺には、弥生時代を初めとして、古墳時代、律令時代の遺跡が数多く分布している。

弥生時代の遺跡では、坂本中遺跡(20)があり、古墳時代まで繁栄した大規模な集落跡である[1]。

古墳時代は道仙古墳群(11)がある。道仙古墳群からは木棺直葬の主体部や古式土師器壷，壷棺，赤色顔料などが確認されている[2]。

また中尾古墳(8)や細曽古墳群(21)がある。細曽1号墳は南北17.5 m，東西15.5 m，高さ1.2 m の長方形をなす比較的大きな方墳で、主体部上に赤色顔料を塗布した土器が供献されていた[3]。

薄井原古墳群(14)は、その中でも最も代表的なもので、この地域の他の古墳と比較すると、その規模や内容が隔絶している。薄井原古墳は、長さ50 m の前方後方墳で、後方部には片袖形横穴式石室2基が造られ、それぞれ家形石棺と組合せ式箱形石棺を内蔵している[4]。

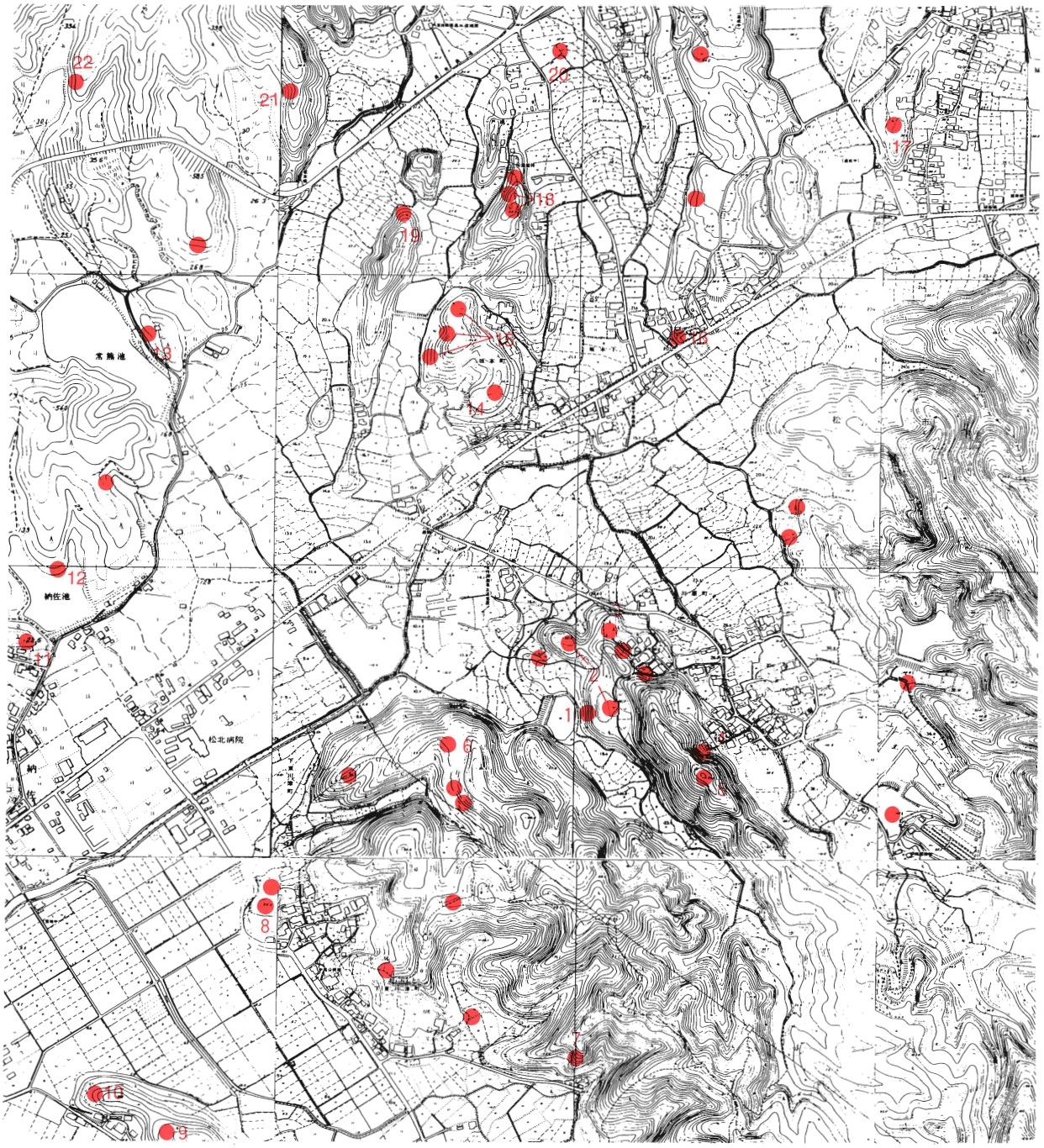
このほか本遺跡周辺の分布調査の結果、本遺跡が所在する丘陵から方墳が7基確認され、川原後谷古墳群(2)と命名された。

1～4号墳は本遺跡の上方に位置する。

1号墳は南北11m、東西10m、高さ1～3mのほぼ正方形をなす方墳で、墳裾に石材が散乱している。

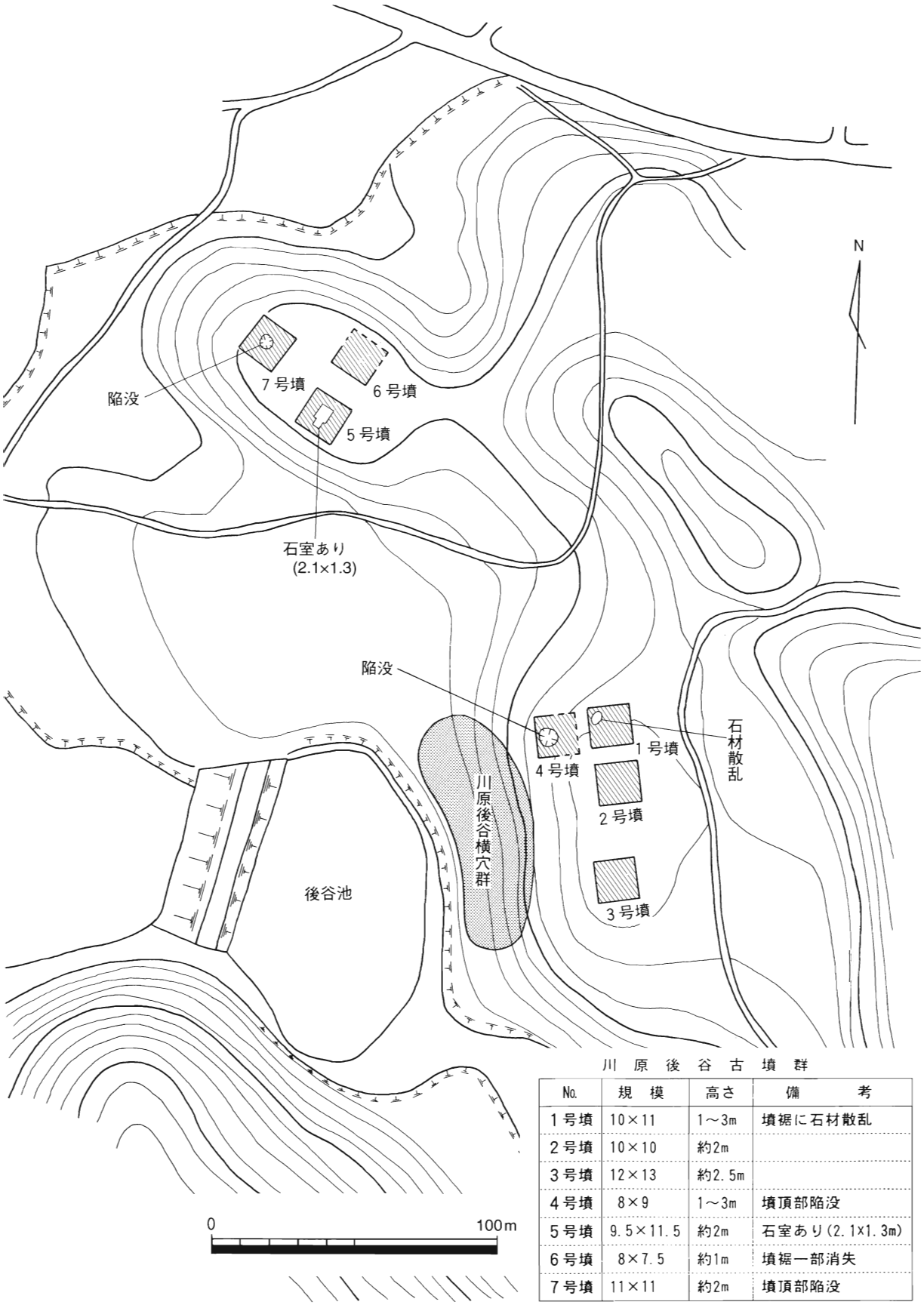
2号墳は1号墳の南側に位置し、1辺10 m，高さ約2 m の正方形をなす方墳である。

3号墳は南北13 m，東西12 m，高さ約2.5 m のほぼ正方形の方墳で、7基中最も南側に位置する。古墳の規模は7基中最も大きい。



第３図　周辺の遺跡

１．川原後谷横穴群　２．川原後谷古墳群　３．川原庄の上横穴群　４．荒神古墳　５．後谷古墳群
６．小松谷古墳　７．仁王ヶ谷横穴群　８．中尾古墳　９．川津第11号墳　10. 川津第12号墳
11. 道仙古墳群　12. 納佐池遺跡　13. 常熊古墳　14. 薄井原古墳群　15. 香々廻古墳群　16. 流田遺跡
17. 内田功之助裏山古墳　18. 小林古墳群　19. 中久路古墳　20. 坂本中古墳　21. 細曽古墳群
22. 沢奥横穴群



川原後谷古墳群

No.	規模	高さ	備考
1号墳	10×11	1～3m	墳裾に石材散乱
2号墳	10×10	約2m	
3号墳	12×13	約2.5m	
4号墳	8×9	1～3m	墳頂部陥没
5号墳	9.5×11.5	約2m	石室あり(2.1×1.3m)
6号墳	8×7.5	約1m	墳裾一部消失
7号墳	11×11	約2m	墳頂部陥没

第4図　川原後谷古墳群詳細図

4号墳は1号墳の西側に位置し、南北9 m、東西8 m、高さ1～3 m のやや長方形をなす方墳である。墳裾部が陥没している。

5～7号墳は丘陵の西側に位置する。

5号墳は南北9.5 m、東西11.5 m、高さ約2 m の長方形をなす方墳で、2.1×1.3 m の横穴式石室と推定される石室があり、天井石が失われている。

6号墳は南北8 m、東西7.5 m、高さ1 m のほぼ正方形をなす方墳で、墳裾が一部消失している。7基中最も規模が小さい。

7号墳は7基中最も西側に位置し、1辺11 m、高さ約2 m の正方形をなす方墳である。墳頂部が陥没している。

奈良時代になると、出雲地方にも律令制が普及し、朝酌川支流沿いにも条里制が施行されたと考えられる(5)。

また芝原遺跡からは、300 m 近くになる大規模な溝や掘立柱建物が検出されたほか、「出雲」、「出雲家」,「校尉」などの墨書土器や丹塗土師器、製塩土器が出土しており、島根郡家が推定されている(6)。

註(1)	松江市教育委員会	『芝原遺跡』	1989年
(2)	島根県教育委員会	『島根県埋蔵文化財調査報告書Ⅹ』	1983年
(3)	松江市教育委員会	『細曽１号墳』	1987年
(4)	島根県教育委員会	『薄井原古墳調査報告』	1962年
(5)	島根県教育委員会	『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	1987年
(6)	註 (1) に同じ		

第3章　調査の概要

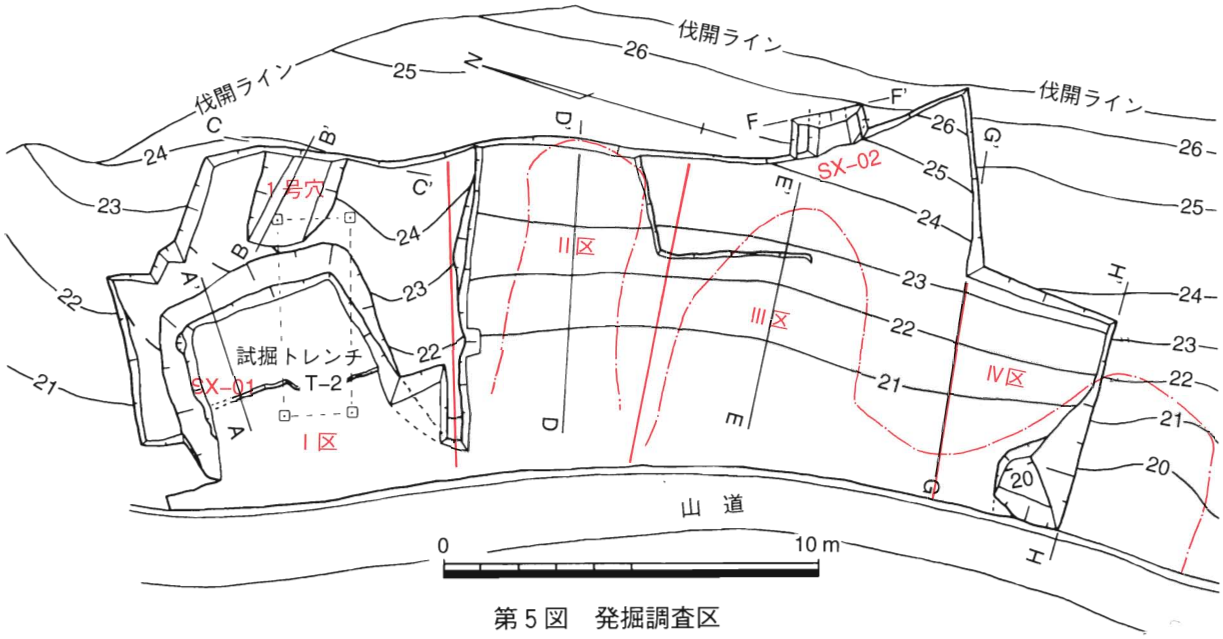
（１）調査概要

本遺跡は北西方向に舌状に突き出た丘陵の西側斜面の山林で、尾根筋上には川原後谷古墳群がある。

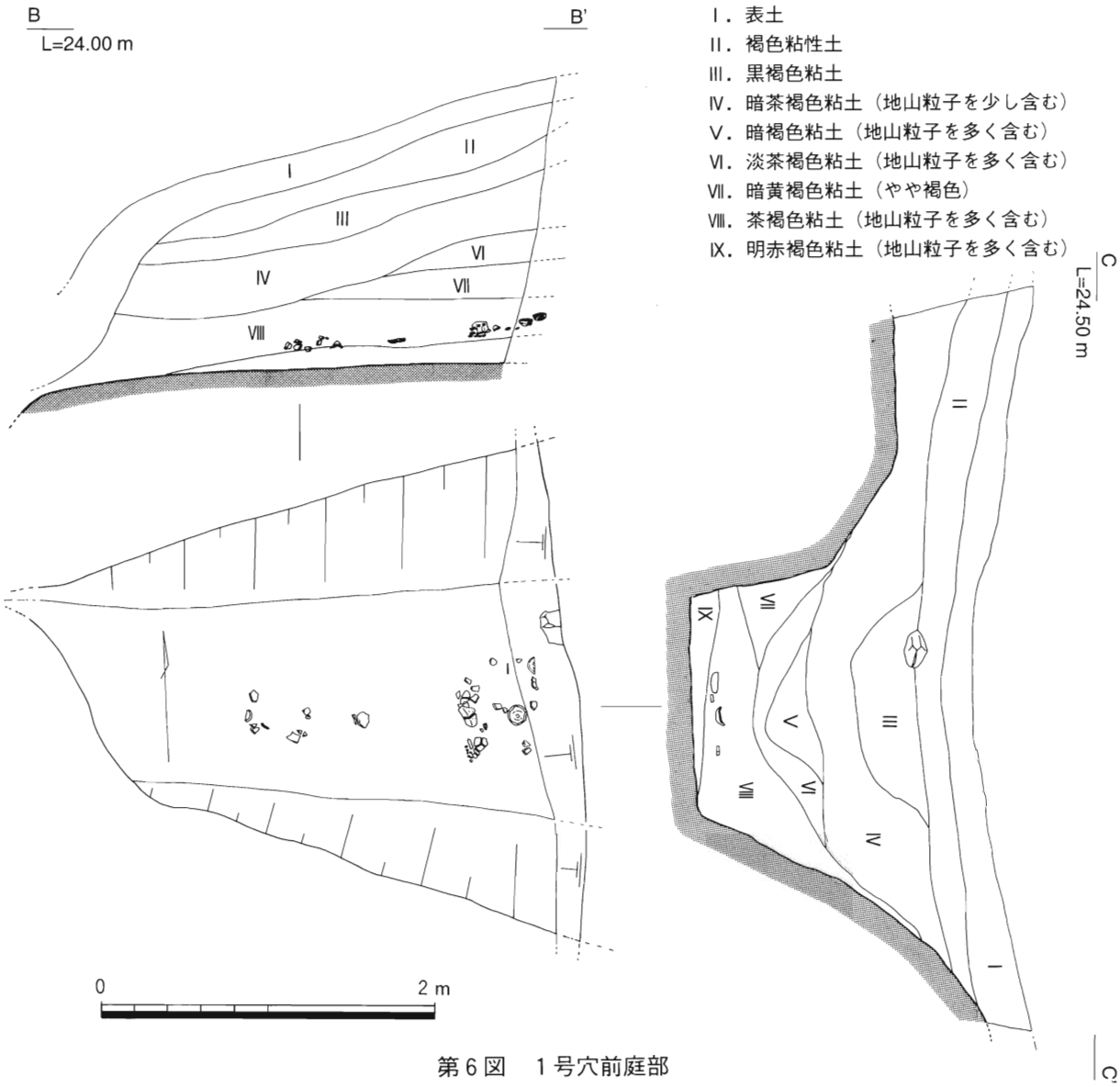
山林伐開後、試掘箇所以外からは横穴墓特有の地形が3か所確認された。試掘トレンチの上半分から検出された遺構を1号穴とし、下半分から検出された遺構を2号穴とした。

発掘調査にあたっては凹状の地形別に調査区を新しく設定し、試掘を実施した調査区から南へ順にⅠ区，Ⅱ区，Ⅲ区，Ⅳ区とした。

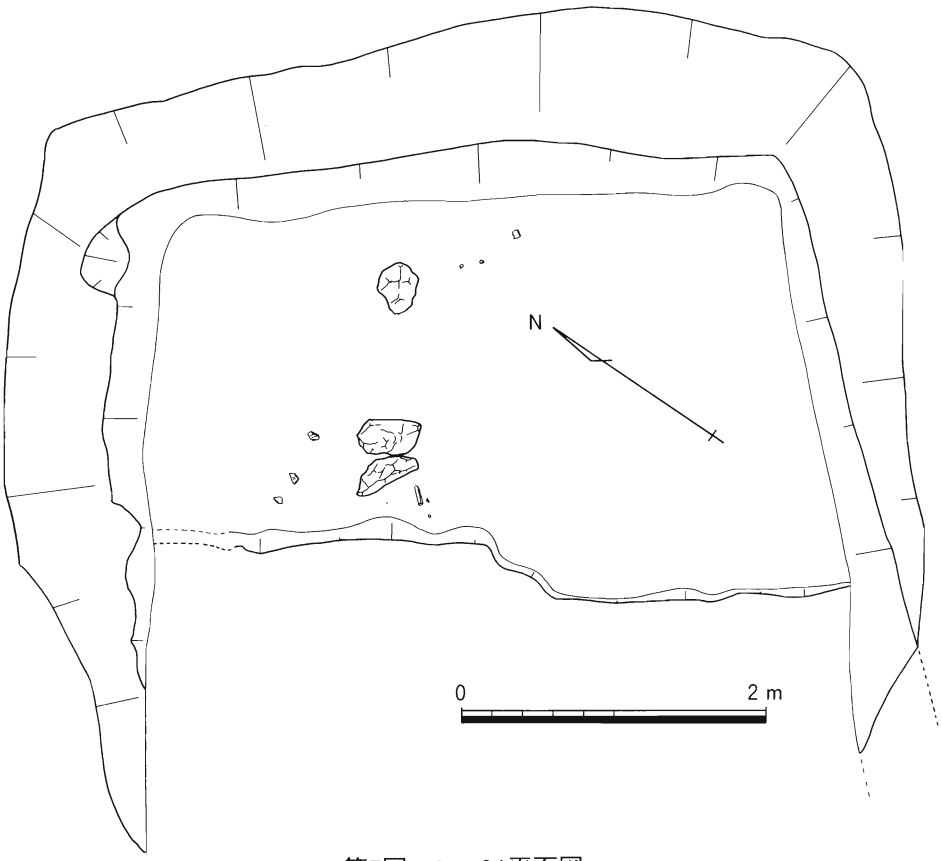
Ⅰ区では、まず試掘時に検出された遺構の全体の検出を行った。調査の結果、横穴墓前庭部と推定されていた遺構(1号穴）は、地山を断面凹状に加工しており、埋土の茶褐色粘土（地山粒子を多く含



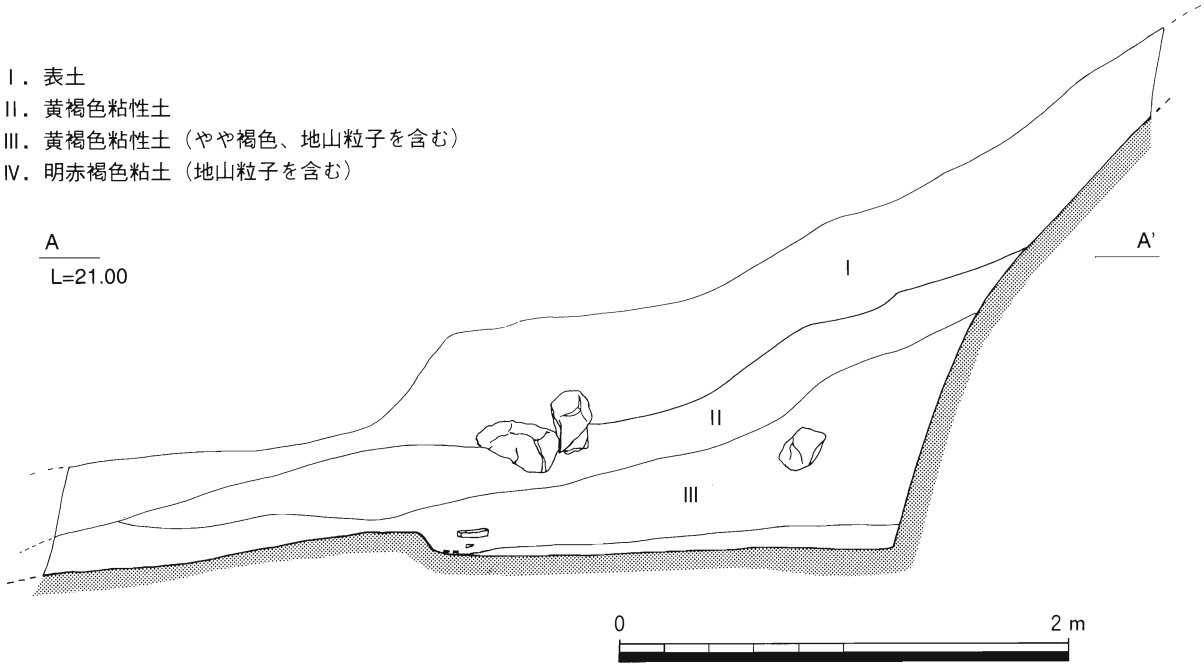
第５図　発掘調査区



第６図　１号穴前庭部



第7図　SX–01平面図



第８図　SX–01セクション

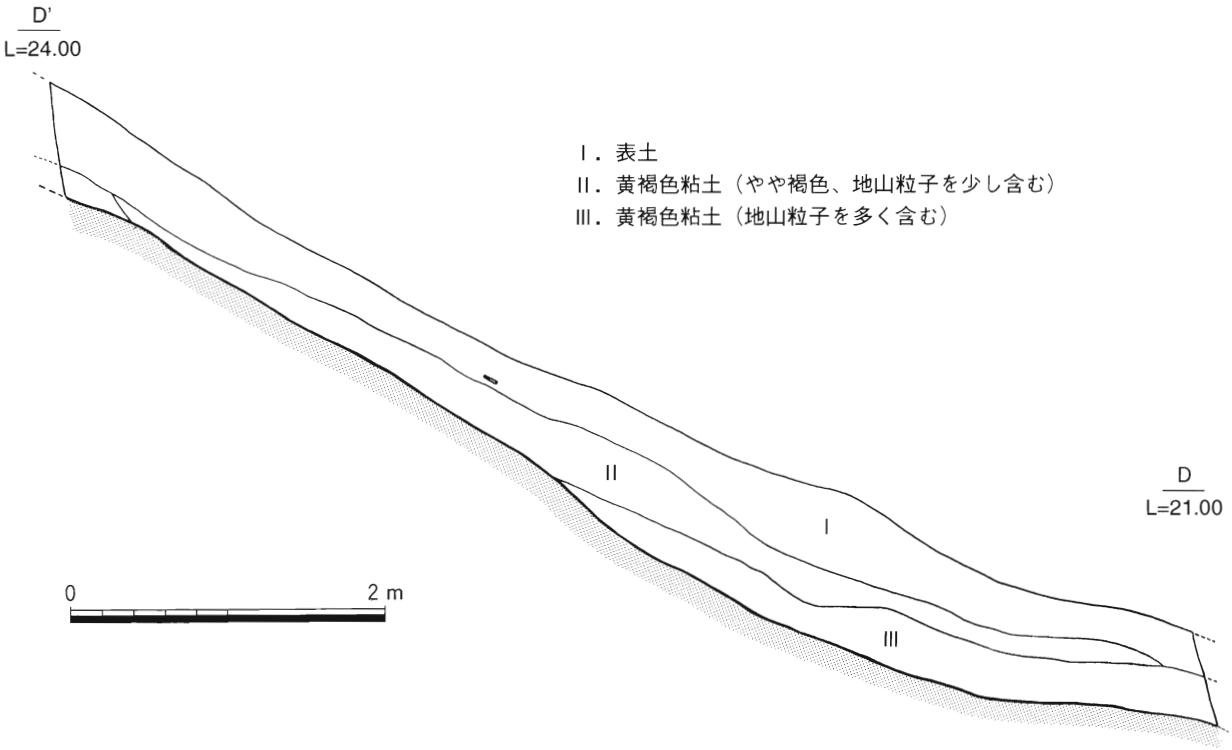
む）からは、丹塗り土師器のほか、須恵器では山本編年Ⅲ期の遺物に類似したものが多く、甑（はそう）、蓋坏、高坏、壷が出土している。また遺構の埋土には、黒褐色粘土が確認でき、須恵器甕片を中心とした遺物が多量に出土した。甕片の7～9割は磨耗気味で、土器の出土状況は撹乱されていた。

以上の結果から、1号穴は横穴墓の前庭部である可能性が高い。

一方、試掘時に横穴墓の玄室の壁及び床面と推定されていた遺構(2号穴）は、調査の結果、横穴墓ではなく加工段(SX−01)であることが確認された。平面プランは方形を成しており、ピットはなく床面は一段下がっている。出土遺物は全て須恵器で、黄褐色粘性土（やや褐色，地山粒子を含む）から三角形透かしと思われる高坏の脚部片，壺片，瑕体部片が出土しており、山本編年Ⅲ期のものに類似している。遺物の堆積状況から、SX−01の遺物は1号穴からの流れ込みである可能性が高く、1号穴がSX−01に先行することはないと考えられる。

従ってSX−01は1号穴と同時期か、それよりも少し先行するものと推定されるが、遺構の性格は不明である。

Ⅱ区では、Ⅰ区と異なり岩盤も脆い。地山の人為的加工はなく自然地形と推定され、遺物も大部分が甕片で、そのほとんどが表土からの出土であったので、横穴墓は存在しないと考えられる。丘陵上に川原後谷古墳群があるので、流れ込みと考えられ、遺構は存在しないと考えられる。

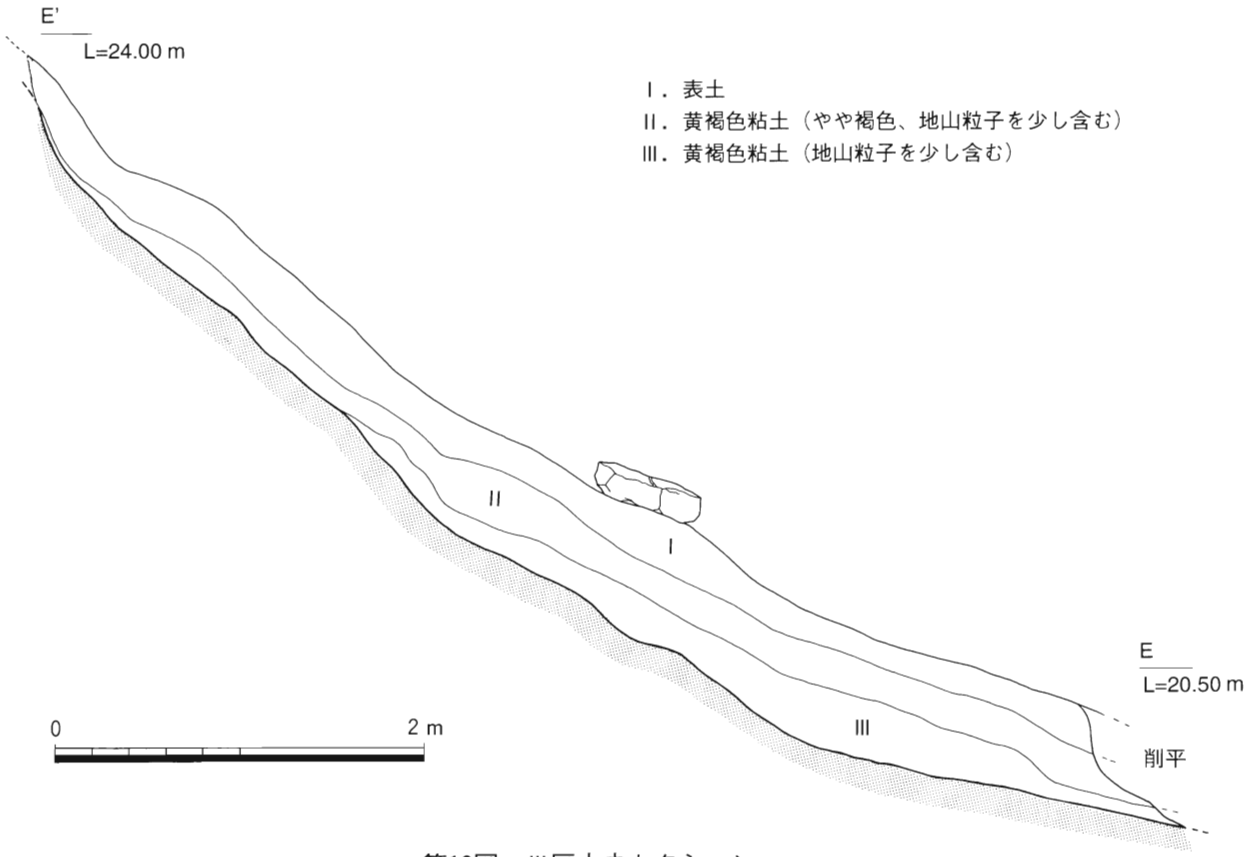


第９図　Ⅱ区中央セクション

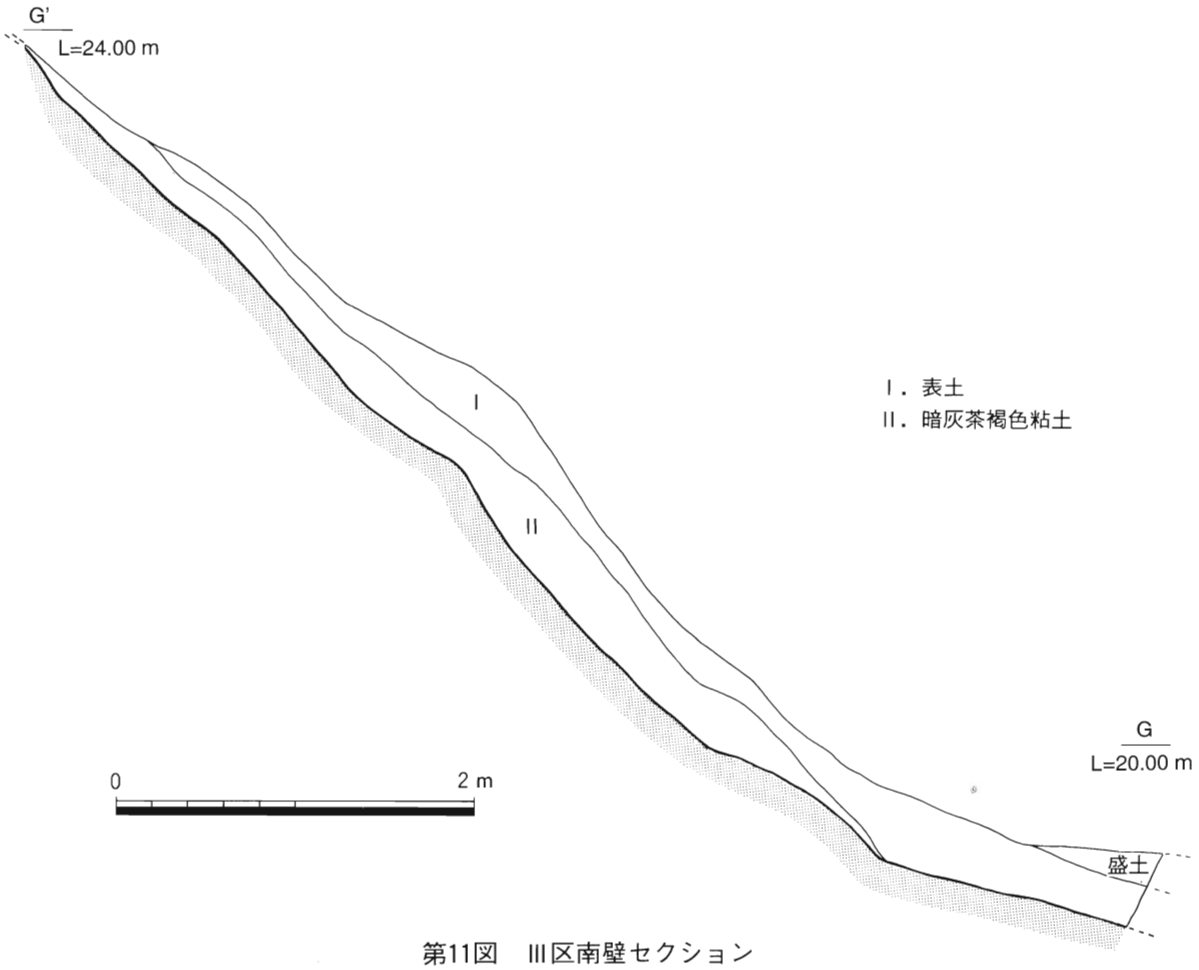
Ⅲ区では、伐開ライン付近からSX−02が検出された。平面プランは横穴墓前庭部先端の形状に似ており、人頭大の泥岩が埋まっている。遺物は出土しなかったが、1号穴と同じ岩盤に掘削されていることや、遺構の平面プランが横穴墓前庭部特有の形状を成していることから、SX−02は横穴墓前庭部である可能性がある。

SX−02の下からは、表土から甕片が3片出土したが、地山の人為的加工がないことから横穴墓も存在しないと考えられる。

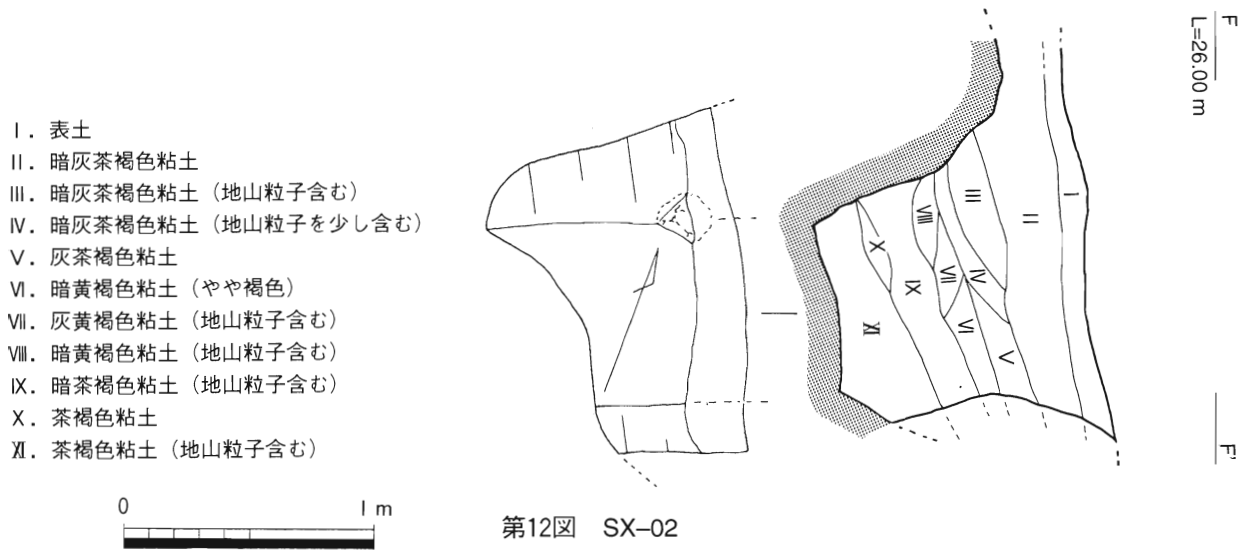
Ⅳ区では、遺構・遺物ともに検出されなかった。地山の人為的加工はなく自然地形と考えられ、横穴墓も存在しないと考えられる。



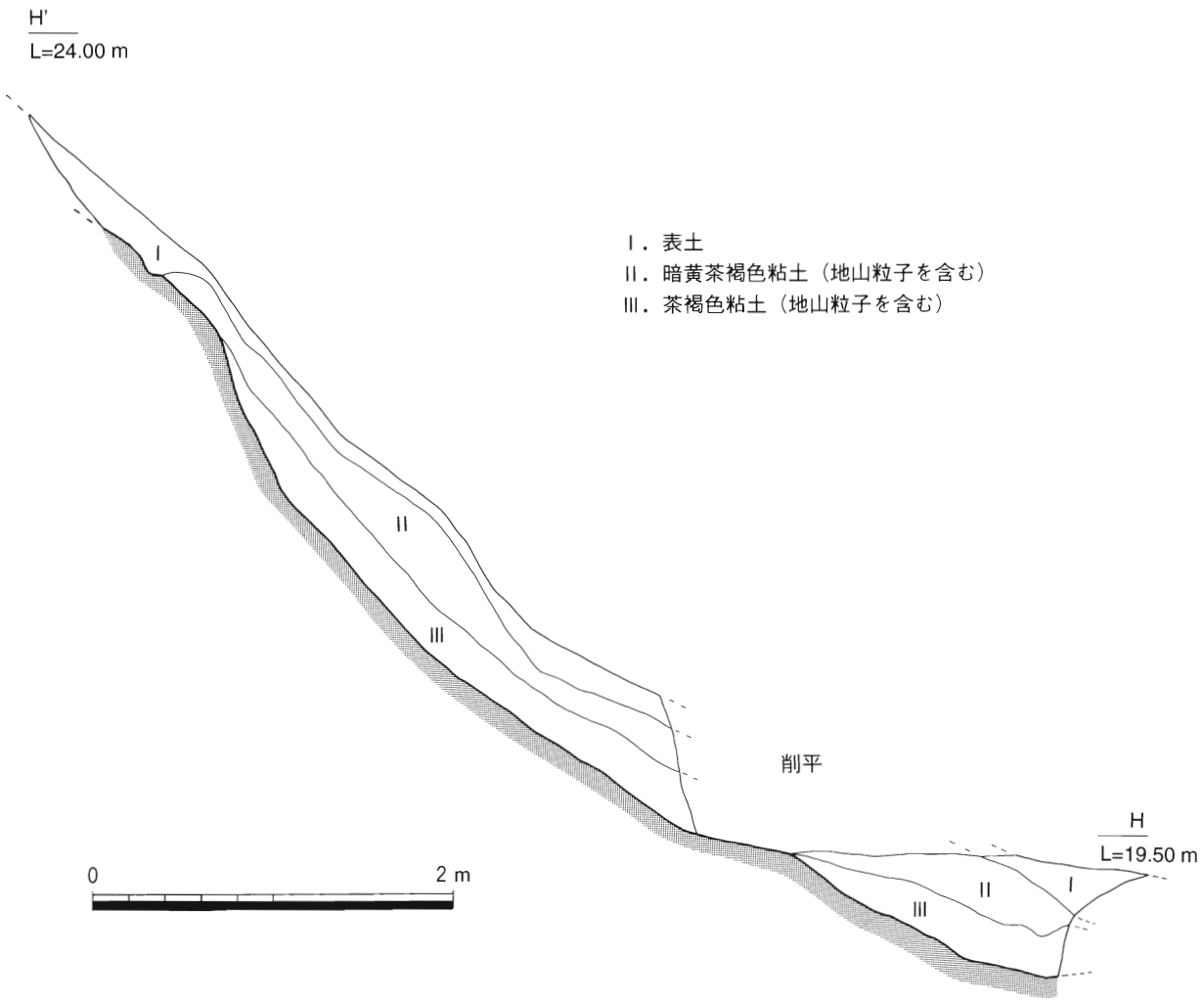
第10図　Ⅲ区中央セクション



第11図　Ⅲ区南壁セクション



第12図　SX–02



第13図　Ⅳ区南壁セクション

（2）出土遺物について

第14図1～12は1号穴茶褐色粘土（地山粒子を多く含む）から出土した遺物である。

1は瓹の口縁部である。口縁部の立ち上がりは、内側に湾曲したのち外反気味に開き、端部は尖っ

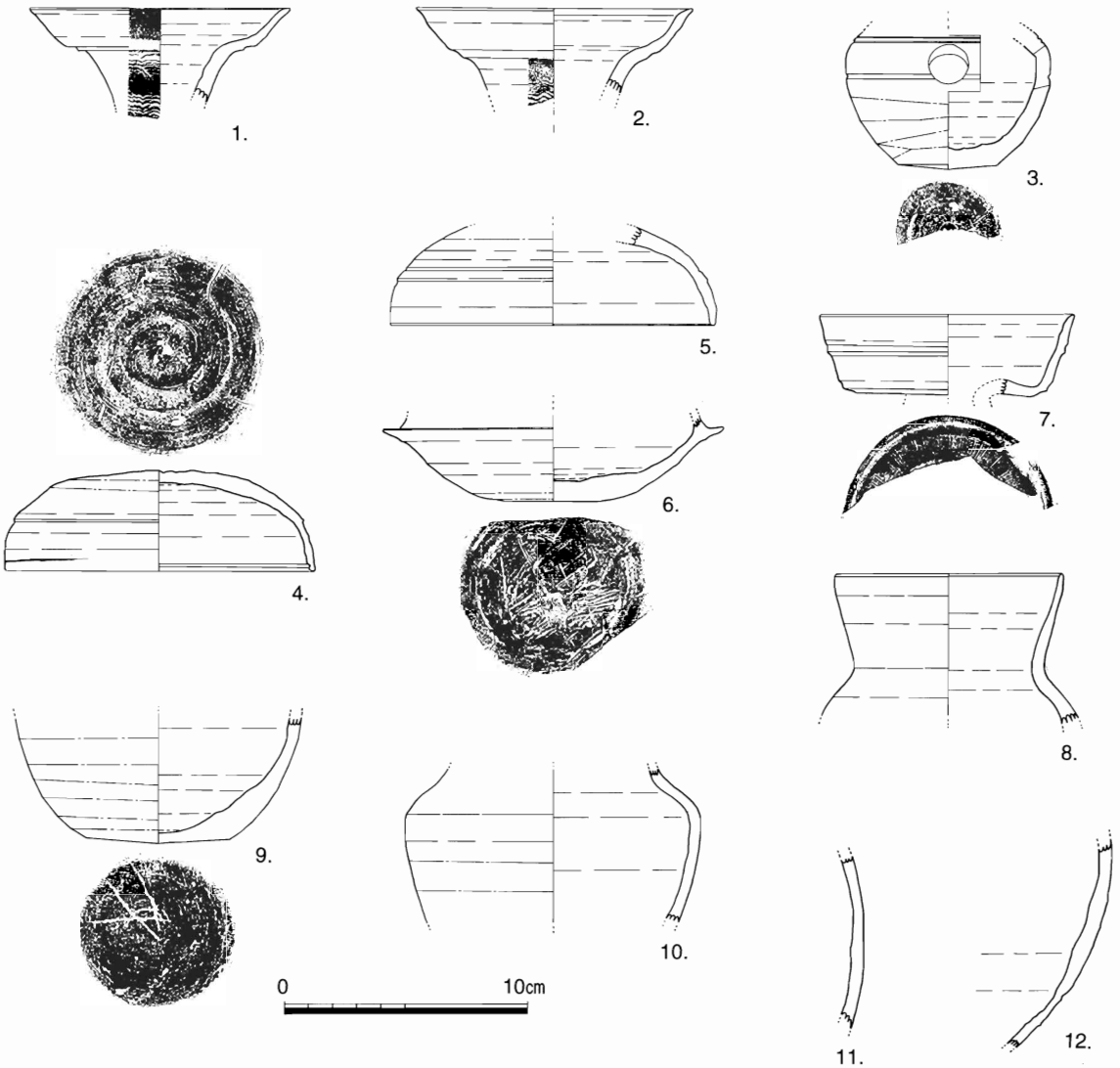
ている。頸部には波状文が施されている。

2も甕の口縁部である。口縁部の立ち上がりは、内側に湾曲したのち外側に開く、端部は尖っている。頸部には波状文が施されている。

3は甕の体部で、胎土には1～3㎜の白色砂粒が少し混じる。体部には二条の沈線で区画された中に施文されているようであるが、磨耗が著しく不明である。体～底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。形態的には肩部が角張っており、底部は平底になっている。

4は坏蓋で、胎土には0.5～1㎜の白色砂粒が少し混じる。平坦な天井部から内湾して口縁部に至り、端部は丸い。口縁部外面に一条の鈍い稜、内面に一条の沈線を施す。天井部には回転ヘラケズリが施されており、ヘラ記号がある。

5も坏蓋で、胎土には0.2～1㎜の白色砂粒が少し混じる。天井部はほとんど残っていないが、回転ヘラケズリが施されており、天井部全体に回転ヘラケズリが施されていたと考えられる。形態は内湾



第14図　1号穴出土遺物

しながら口縁部に至るもので、端部内面がなだらかで緩い段状に仕上げられており端部は丸い。外面には沈線と稜が施されている。

6は坏身で、底部は肥厚する。磨耗気味ではあるが、底部に回転ヘラケズリとヘラ記号が施されており、受部は斜め上方に伸びる。

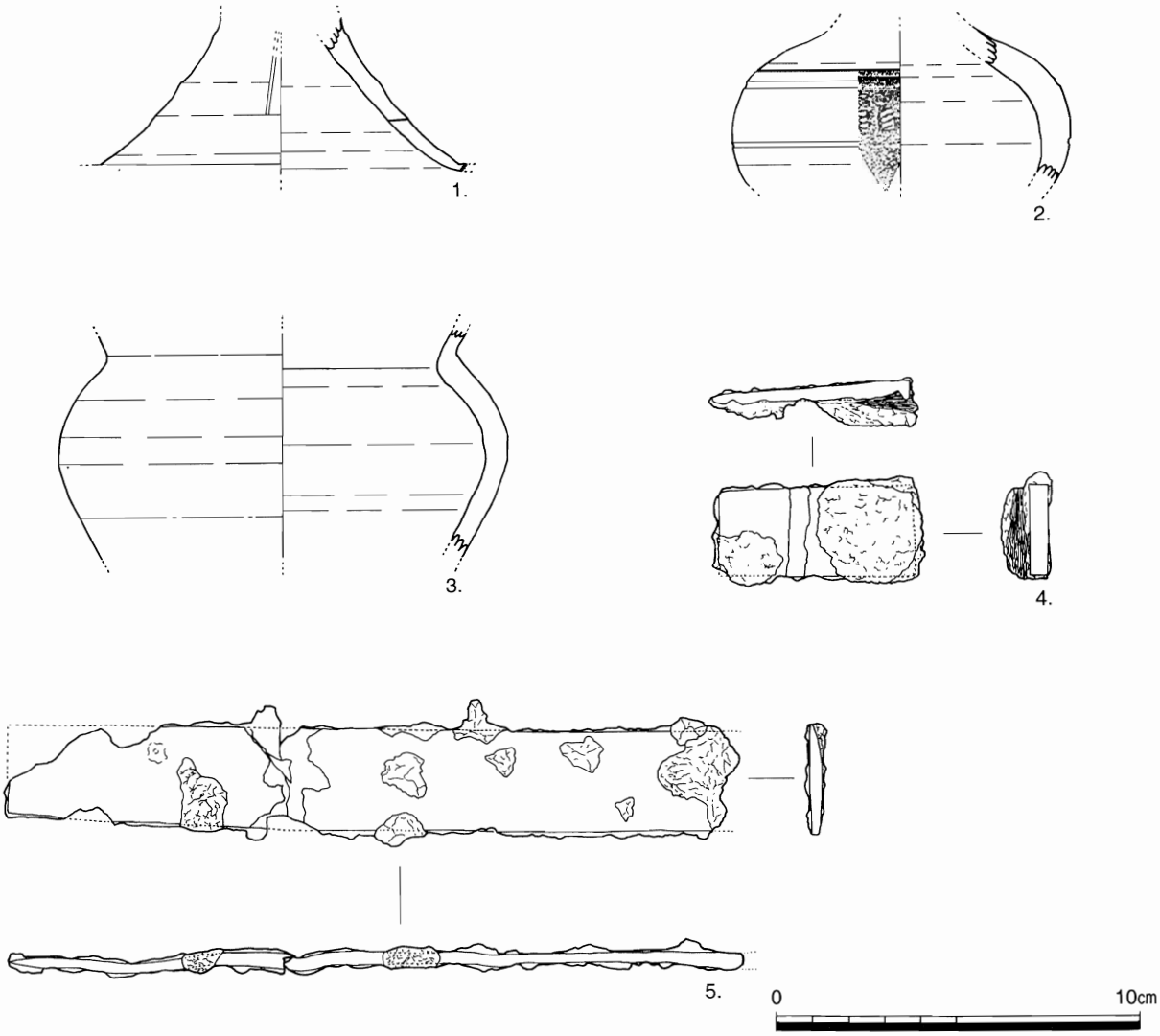
7は高坏の坏部である。口縁部の立ち上がりは、外側に直線的に開くもので、端部は尖り気味である。坏部外面底部に刺突文を施している。

8は直口壷で、口縁部の立ち上がりは、外側に直線的に開いた後、やや内傾する。

9は壷底部の破片で、胎土には2㎜程度の砂粒が少し混じる。外面には体～底部に回転ヘラケズリが施されており、平底の底部にはヘラ記号がある。

10も壷で、胎土に直径7㎜程度の石が1つ混じっている。肩部がやや角張っており、体部外面には回転ヘラケズリが施されている。

11は赤彩土器で、外面に赤色塗彩された痕跡が少し残っている。内外面とも磨耗気味で調整は不明



第15図　SX-01出土遺物

である。胎土には1～3㎜の砂粒が混じる。

12も赤彩土器で、外面に赤色塗彩された痕跡が残る。胎土には1～3㎜の砂粒が混じっている。

内外面ともに磨耗気味で調整は不明である。

第15図1～3はSX-01の黄褐色粘性土（やや褐色，地山粒子を含む）から出土した須恵器である。

1は高坏脚部で、胎土には0.1～0.5㎜の白色砂粒が少し混じる。透かしの数は不明であるが、三角形透かしと考えられる。

2は瑤の体部で、胎土には0.5～1㎜の砂粒が少し混じる。体部には二条の沈線で区画された中に刺突文が施されている。

3は壷で、胎土には1㎜程度の砂粒のほか、直径6㎜程度の石が1つ混じっている。頸部は外側に開く形で、体部外面には回転ヘラケズリが施されている。

第15図4,5はSX-01の表土から出土した鉄製品である。後世のものである可能性もあるが、1号穴の下からの出土であるので、1号穴から流れ込んだ可能性もある。

4は楔形の鉄製品である。法量は刃長5.9㎝、刃幅3.0㎝、刃厚は5㎜を最大とし先端に向かって薄くなる。後世のものか。

5は長方形状の鉄製品である。法量は残存長19.4㎝、刃幅2.7㎝、刃厚は4㎜を最大とし片側が薄くなっている。後世のものか。

第4章　小　　結

調査の結果、横穴墓の前庭部が1つ、横穴墓前庭部の可能性があるものが1つ、性格不明の加工段が1つ検出された。

横穴墓の遺構は、玄室の状況を確認できなかったので詳細は不明であるが、1号穴については、山本編年Ⅲ期の遺物に類似した遺物が多く出土しているので、古墳時代後期の横穴墓である可能性がある。

SX-02については、1号穴と同様の地山の加工が認められるため、横穴墓の前庭部である可能性が高い。

試掘時に2号穴と考えられた遺構は、調査の結果、加工段(SX-01)であることが判明したが、同様の遺構の検出例がないので、今後の成果によるところも大きい。土層や遺物から、時期的には1号穴と同時期か、1号穴に少し先行するものと考えられる。

このように調査地域内では完全な遺構を検出することはできなかったが、川原後谷古墳群の新発見と、その丘陵西斜面にある横穴墓群の存在をほぼ確定することができた。

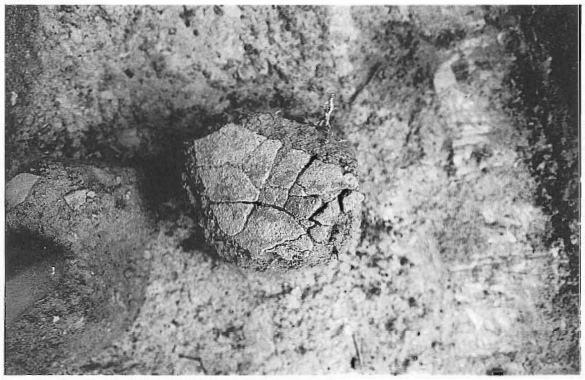
近隣には多くの古墳や横穴墓群が所在しており、今後の調査も大いに期待されるところである。

図　　版

１号穴セクション（南方から）

１号穴セクション（西方から）

１号穴遺物検出状況

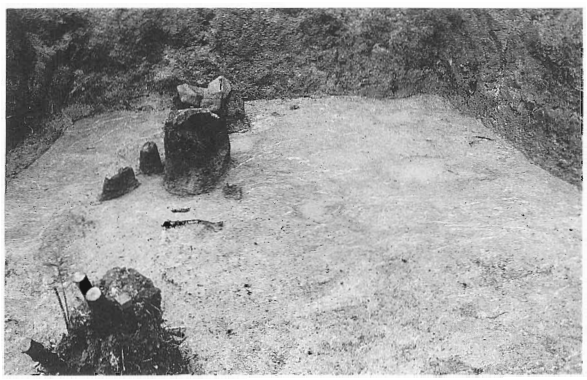


１号穴赤彩土器検出状況

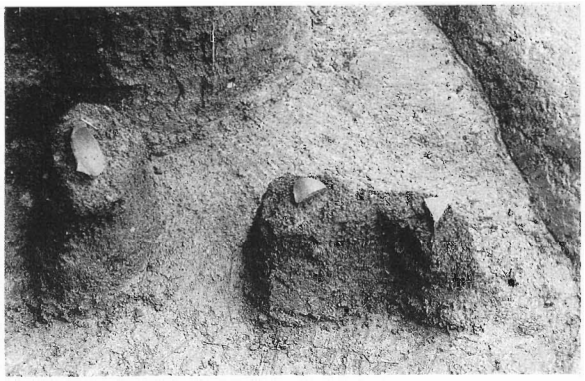
１号穴完掘状況

SX–01セクション

SX–01（北方から）



SX–01（西方から）



SX–01遺物検出状況

SX–01完掘状況

II区中央セクション

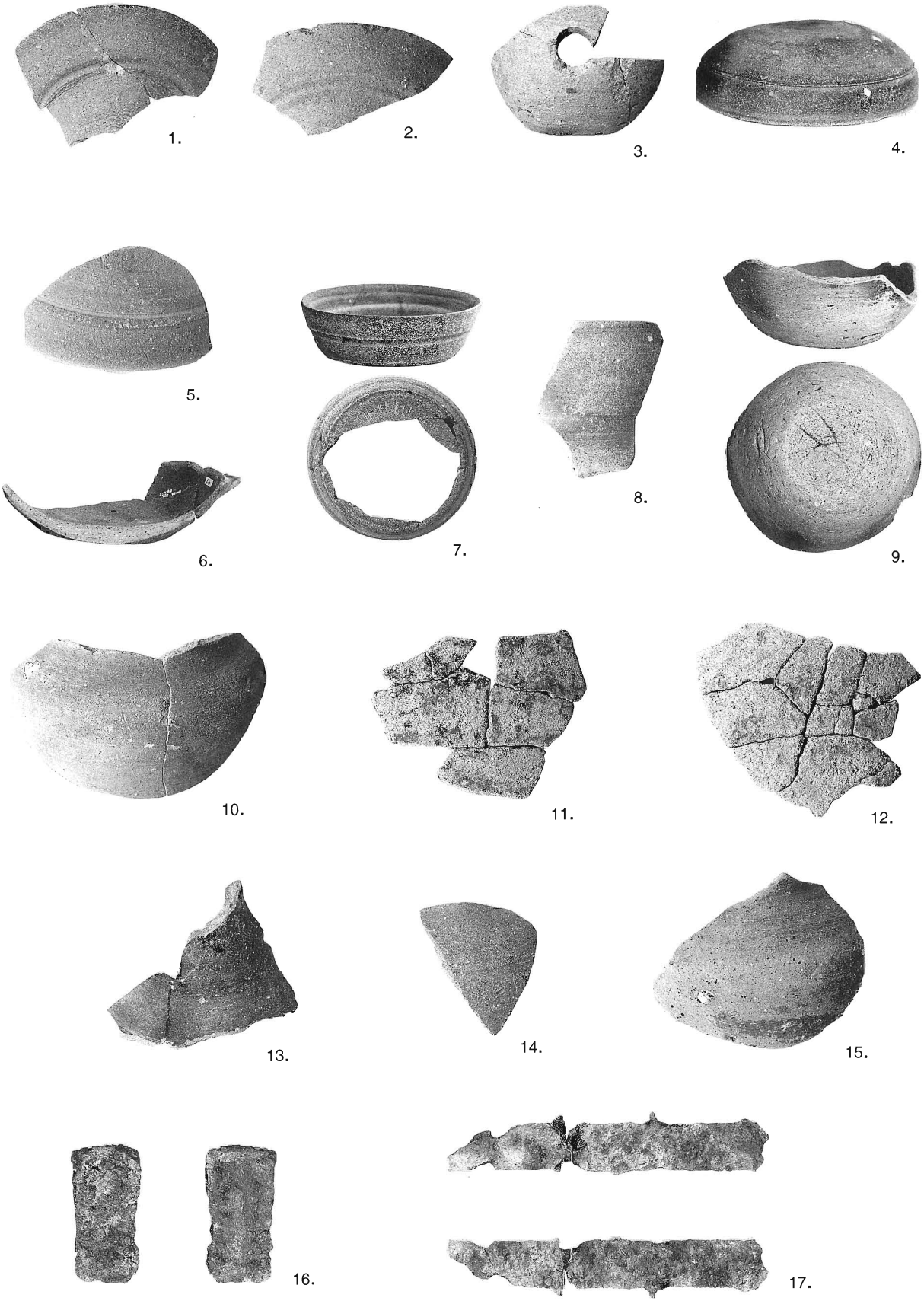
SX–02完掘状況

III区中央セクション

III区南壁セクション

IV区南壁セクション

調査後全景



1 号穴（第14図）・SX–01（第15図）出土遺物

川原後谷横穴群発掘調査報告書

1996年3月

発　行　松江市教育委員会
(財)松江市教育文化振興事業団

印　刷　有限会社　高浜印刷所
松江市北掘町8